

## 西淀川公害訴訟と森脇君雄さん

今年7月16日、宮本憲一先生や若い仲間らと大阪市西淀川区の「あおぞら財団」を訪ねた。あおぞらビル5階の「西淀川・公害と環境資料館（エコミュージズ）」を見学して、貴重な資料などの説明を受けた。「あおぞら財団が取り組む地域再生のまちづくり」のレクチャーに続いて、猛暑のなか西淀川のまちを案内してもらった。財団名誉理事長の森脇君雄さん（写真右）にも同行してもらい、公害訴訟をはじめ当時の話をお聴きできた。



その森脇君雄さんが朝日新聞12月13日の「天声人語」に登場していた。嬉しくなって切り抜いておいたので紹介したい。

半世紀ほど前、大阪市西淀川区の空は昼なお暗かった。重工業地帯の風下にあたり、化学や製鋼などの工場から黒や黄色の煙がもうもうと流れ込む▼「晴れた日でも六甲山や生駒山が見えない。昼間も前照灯をつけて走りました」。タクシー運転手だった森脇君雄さん(83)は話す。住民が抗議に出向くと、企業から「営業妨害だ」と追い返された▼のどや肺を病む人が続出するのを見かね、森脇さんたちは1978年、企業や国を相手に裁判を起こす。原告計726人、西淀川公害訴訟である。20年の歳月を要したが、工場排煙だけでなく車の排ガスによる被害も認められ、公害史に名を刻む▼裁判が済み、原告団は解散したのかということ、そうではなかった。和解金をもとに森脇さんたちは「あおぞら財団」を立ち上げる。緑地を増やし、公害の実態を授業で伝え、海外から研修団を受け入れてきた▼排煙規制を強める大気汚染防止法が施行されてから今年で50年になる。光化学スモッグはいまも折々に発生し、幹線道路の上空には不気味な雲が現れる。深刻な被害を防ぐには、絶えず目をこらし、声を上げ続けなければいけない。それが空というものなのだろう▼あすから3日間、東京都内で「公害資料館連携フォーラム」という催しがある。水俣や新潟、西淀川など各地の公害資料館運営者や被害住民らが語り合う。かつて都内で大気汚染が激しかった場所を訪ね、現状を調べる。公害を身をもって知る人々のたゆまざる努力を思う。

「公害資料館」で思い出すのが、四日市公害の「語り部」沢井余志郎さんである。長年にわたり、沢井さんや公害患者の皆さんらの運動により、2015年3月に近鉄四日市駅近くに「四日市公害と環境未来館」がオープンした。待ちわびた開館を喜ぶ沢井さん、公害訴訟の原告・野田之一さんの写真を思い出す。沢井さんは、その年の12月16日87歳の生涯を終えられた。沢井さんには日本環境会議名古屋大会、四日市大会などでお世話になった。レポートで沢井さんや四日市公害について何回も書いてきた。

(2018年12月19日)